
ジョーカーな狐と狸さん

ぺんぱるぺ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジョーカーな狐と狸さん

【Nコード】

N8951Z

【作者名】

ぺんぱるへ

【あらすじ】

隔離された世界。鬼と呼ばれる化け物とこの世界は密接な関係にある。鬼は人を喰い殺し、ときには、鬼は人に能力を与える。中央エリアの片隅に住む香宮司（かみやうじ） 旧介（きゅうけい）は、復讐相手を探し続けていた。そして、復讐相手とうりふたつの少女が目の前に現れる。少女は頬を赤く染め、小さな声で告白した。「あなたのストーリーカーです。大好きです、付き合ってください！」僕さま青年とストーリーカー少女のお話です。

狐さんの世界の終わり（前書き）

初めまして。

小説と言えるかも分からない代物ですが、お読み頂ければ幸いです。

狐さんの世界の終わり

その日、香宮司こうみやうじ 旧介きゅうけいの世界は終わりを迎えた。何よりも大切で、陳腐な言葉を使うなら愛していたと表現しても良いような、掛け替えのない世界であった。

最後は笑ってしまうほどに呆気ないものだ。馬鹿馬鹿しいものでもしかなかった。

それでも、そんなくだらない崩壊でしかなかったとしても、旧介には永遠のことに思えて仕方ない。

自慢の長い髪を優雅に揺らし、旧介の全てであった彼女は美しく微笑んだ。神がいるならば、彼女のような存在であるのかもしれない。そう思わせる程のものを彼女は持っていた。

すらりとした足が、ゆっくりゆっくりとこちらへ近づいて来る。旧介は逃げなかった。いや、正確に言うならば、逃げることなどできなかつた。誰がこの状況で彼女から逃れられるだろうか。

旧介の身体はもうボロボロだった。腕は折れ、腹は切り裂かれ、激痛にただ堪えるだけしかできないような状態である。しかし、だからといって、旧介が無傷で体力も有り余っていたとしても、彼は逃げるなどという愚かな選択はしなかつただろう。

旧介の世界は終わったのだ。彼女は旧介の世界を作り上げ、慈しみ、そして破壊した。彼女がそうしたのだ。いや、彼女は彼女であつて、彼女ではないのかもしれない。しかし、もうそんなことはどうでもよかつた。

彼女は旧介を殺すだろう。簡単に、一瞬で全てを終えるに違いない。それはあまりに残酷であり、恐怖であり、そして何よりも幸福なことであるのだ。たとえ旧介がここで生き残つたとして、何が残

るといふのか。何も残らない。なぜならば、それが香宮司 旧介であつたからだ。彼女が居て、初めて彼は息をすることができる。

「お前は笑うのね」

鈴を鳴らしたような、澄んだ声音だつた。

聞き親しんだ彼女の声は、こんな時でさえあまりに心地よく旧介の鼓膜を侵していく。

地面に倒れ込んだ旧介を真つ直ぐに見下ろす彼女は、どこまでも美しい存在だつた。

「逃げないのか？ 私はお前を殺すのに。それは何があつても変わらないし、変えられない選択だ」

「逃げて、欲しいの、か？」

呼吸をただけで苦痛に悲鳴をあげる身体を酷使して、どうにか声を紡ぎだす。彼女からの言葉を無視するなどできるわけがない。彼女を見上げ、旧介は笑いかけた。

それを見て、彼女は初めてその笑みを崩してしまった。不愉快そうに曲げられた眉も、軽蔑していることを何より物語る細められた目も、何もかもがただ美しく、愛おしい。

恍惚とした表情を惜し気もなく晒す旧介を一瞥し、彼女は『彼女』を演じることがやめた。

「……私は長生きしているからさ、人間なんてそりゃあ腐る程見てきたよ」

先程までとは何もかもが違う低い声と不機嫌に歪められた顔。もはやそれは彼女ではなかつた。

「でもアンタみたいな気持ち悪いやつ見たのは初めてだ。最低最

悪な気分になった、すげえ吐きそうだし」

「死ね」

「おや、やっぱり私じゃ優しくしてくれないのかな？ そっちの方が似合ってるよ、アンタ」

「黙れ、カスが。僕はあの人にしか用など無いんだよ、早くくたばれ」

「素敵な言葉と憎悪だね、アンタやっぱりいいよ。そっちの方がかっこいいし、私のタイプだわ」

今までの心酔しきった感情は瞬く間に消滅する。今、旧介にあるのは酷い憎しみと嫌悪感だけであった。

それは夢を見ていたようにも思えることだ。悪夢ではない。素晴らしい幸福な、死んでも覚めたくない、そんな夢である。しかし、夢は何があるかと夢でしかない。夢は終わる。旧介の世界が終わるように。無情なまでに、一切の慈悲もなく。

彼女はもう彼女ではない。彼女の姿をした化け物だ。化け物よりもっと酷いものかもしれない。旧介は彼女の皮を被ったそれを睨みつけた。それは愉快そうに肩をすくめるだけだ。

（殺してやりたい。いや、そんなもんじゃ足りないだろうが…。このカスが存在していたその事実を消してやりたい。それができれば、僕は笑って死ねるだろうによ）

旧介の視線を考慮したのか、そいつはしゃがみ込んだ。彼女の目から通されるそいつの視線は不快でしかなかった。

旧介は静かに目を閉じる。旧介が見たかったものは、彼女だけだ。あとは何もいらぬ。むしろ、邪魔な不要物でしかない。

「私はお前を結構気に入ってるんだよ、旧介」

「気安く、名前を、呼ぶな」

旧介と呼ぶことを許したのは、彼女以外にはいない。

「なあ、旧介」

吐きそうだ。

ねっとりとした重い声が身体にのしかかる。それは旧介を決して逃がしてはくれない。

「私を殺しにおいで」

からからとそいつが愉しそうに笑い声をあげる。

殺しに？行くに決まっているだろう。もはや傷の影響で声も出ない。それでも、旧介はそいつへの復讐を誓った。忘れたくとも忘れられない、最低の誓いだった。

「約束だよ、旧介」

そうして、世界は静かに崩壊を迎えた。何も残らない筈のその世界には、憎悪と殺意だけが暗く、しかし、確実に残っている。

殺してやる。そう息もなく吐き出したと同時に、旧介の意識は途絶えた。

狐さんと狸さんが出会いました

「大将、大将、起きましょーや……今日仕事でしょ」

低くしゃがれた声が鼓膜を突き破る勢いで侵入する。

また、瞼を閉じていても分かる程の眩しさに、旧介は不満げに唸り声を上げた。

熟睡していたからか、身体が鉛のように重い。

もう朝であるにも関わらず、睡魔はいまだに旧介を逃がそうとはしなかった。はっきりしない意識のまま、旧介は何とか瞼を開く。瞬間、待っていましたがとばかりに、視界を日光が埋め尽くした。

(……ねみイ)

欠伸を噛み殺し、旧介は心地好い布団から、嫌々ながらも這い出る。

明るさにも目が慣れてきたようで、部屋全体を緩慢に見回すと、慌ただしく動き回る影が視界に映り込む。

影は、男だった。

身長はざつと見たところ高い。坊主のように頭を丸めた大男は、旧介が起きたことに気づいたらしく、足早にこちらに駆け寄った。

鋭く小さな目と、大きな鼻、そして何より口から頬まである大きな傷。相変わらずいつ見ても、恐ろしげな顔をしているな、と旧介は思った。

その厳つい男が目前まで迫ってきてても、旧介は涼しげな顔を崩さなかった。男の威圧感などもうとうと慣れていたのだ。

「大将、あんた今日……あの仕事の日なんですよ？ 分かっています

「？」

「……あの仕事？」

意味が分からないといった顔をしている旧介を見てから、男は大きな肩をがくりと落とした。その顔には「ああやはり」と書かれている。旧介がこの件を忘れているだろうことは、半ば予測していたらしい。

「仕事ってなに」

「……ホラ、鬼切りますとか言ったじゃないですか」

「ああ、そっぴやそんなことも」

「アンタねえ……」

呆れたとばかりにため息を落としてから、大男は「どうなっても私は知りませんからね」と早口に述べる。

その腕には先ほどまで旧介が眠っていた布団が抱えられている。どうやらおまけに布団も片付けておくようだ。いったいいつの間にと驚く旧介に気付かないまま、大男は続けた。

「あ、でも金はちゃんと分けてくださいよ。いや、本当に」

言いたいことは言ったと、大男は満足げに笑った。そのずる賢さに旧介が冷えた視線を送れば、一転して彼はさっと表情を青ざめると走り去っていった。

その無駄な逃げ足の速さには、いつそ称賛の言葉を送ってやりたものだ。

(……それにしても)

床は畳。あるものは箆笥と小さな机が一つのこぢんまりとした室内。ここは旧介の部屋である。

嗅ぎなれた伊草の匂いにぼんやりと浸かりながらも、旧介は部屋で一つしかない窓から顔を出した。

外は、暑すぎるわけでも、寒すぎるわけでもない、程よい気温である。

青い空を何とはなしに見れば、直ぐに視界の中に灰色をした物体が映り込む。無意識のうちに、旧介は顔を歪めていた。

そこには壁があった。巨大な、天に向かってどこまでも伸びているような、そんな壁だった。

この世界には、『鬼』と呼ばれる化け物がいる。

鬼は人間の天敵と云われてきた。何故なら、鬼の好物は人間だからだ。しかも、鬼は簡単に殺すこともできない、まさしく化け物と違ってよい存在である。人間はただ食われるだけであつた。

しかし、ある科学者が鬼についての可能性を提示してから、化け物としての鬼の見方ががらりと変わる。

その可能性は大きく分けて三つある。

一つ。鬼には高い知能を持つものがある。

その中の大半の鬼は、人間と『契約』を結ぼうとする。

何故、鬼が人間と契約をしたがるのかは今のところ分かっていない。

契約を結べば、鬼は人間に力を分け与える。その能力の種類は千差万別だ。しかし、それはこれから何年、何十年と人間が進化したところで、確実に手に入れることのできない力である。

とはいえ、この契約はメリットばかりではない。当然だ。メリットの裏には必ずデメリットが存在する。

契約した人間の命は鬼が管理する。簡単に言えば、鬼は好きなきに契約相手を殺すことができるのだ。

また、契約者がその規約を破つてしまえば、ペナルティーが執行される。

その内容もバラバラだが、生き残れる可能性は限りなく0に近い。つまり、契約してしまえば、鬼に殺される未来は確定事項になる。しかし、それがあつても、異能力というものは人間にとって魅力的であつた。

たとえ、それがどんなに愚かで、馬鹿馬鹿しい選択であつても、だ。

二つ。

鬼の持つ力と科学を合わせることで、今まで実現不可能だったものを開発することができる。

たとえば、空を飛ぶ車。たとえば、一定の場所から場所まで行き来ができるワープゾーン。科学の飛躍に鬼は役立つという可能性である。

三つ。

一つ目の能力を持った人間だけで、部隊を作つたとする。それはただの人間とは段違いに強いものになるだろう。確実な軍事力を簡単に手に入れることができるのだ。

科学者が提示した『鬼の可能性』はこれが全てだ。

最初は馬鹿な話だと人々は罵つたらしい。しかし、鬼のおかげで国が発達し、便利になると、人々の反発は目に見えて消えていった。こうして人間と鬼は切つても切れない関係となる。

しかも、この話はずっと昔の出来事であつた。つまり、何百年もこの国は鬼に怯えながらも、共に歩いてきたことになる。

とはいえ、鬼が人を食うことに変わりはない。それに抵抗しようとしたところで、人は鬼に触れることもできず、無様に死ぬだろう。鬼と人との間には、絶望的なまでの差があつた。

それに加え、勝手に鬼を退治することは有罪だ。

鬼の殺生は、政府公認の『ジョーカー』と呼ばれる免許を持つ人間しか、できないことになっている。

しかし、いざジョーカーを雇って鬼を退治してもらおうと思っても、そうスムーズには行かない。依頼料として金が必要になるのだ。貧しい人間には一生かけても出せないだろうほどの、馬鹿げた大金が。

それほどに鬼退治は危険を伴う。しかし、だからといって、貧乏人は喰われて死ぬというのは、あまりに酷い話だ。

政府もそれを考慮し、この国をぐるりと囲む大きな壁を建てた。

鬼は外に生息している。つまり、外からやって来るのだ。その侵入を少しでも拒むために、壁を造った。

その成果あつてか、鬼の事件はひとまず減少する。しかし、全てが無くなるわけではなかった。

もともと、鬼が関与する事件は非常に多かった。それがようやく少し減っただけで、実際にはあまり違いは無いのだ。

それでも、この国に鬼はどうしても必要な物になってしまった。今更そう簡単に切り離すことなどできるわけがない。

(それは、やけに笑える話だ)

旧介は、灰色をした壁を眺めながら、皮肉げに笑った。見ているだけで苛立たしくなる、そんな笑みだった。

鬼は敵だ。

にも関わらず、その敵がいなければ、もう人間は生きていけなくなってしまう。喰われて、いいように扱われて、殺される。家畜にでもなった気になる。いや、実際、家畜と今の人間はそう変わらないのかもしれない。

ハア、と、息を吐く。

旧介の受けた仕事は、その鬼を殺して欲しいというものだった。

「鬼退治とか……すげえ久々だな。まあ、金がねえから仕方ないけど。銀貨何枚貰えるって約束だったかな」

「確か3枚だったと思います」

「あー3枚かあ。奮発してくれるねえ」

「香宮司くんが嬉しそうで私も嬉しいです。ところでまだ出発しないんですか？」

おつとりとした、可愛らしい声だった。そして、旧介が今まで生きてきた中で、一度として聞いたことのない声であった。付け加えるなら、この家に住んでいるのは、旧介と先ほどの大男だけだ。

（は？）

つまり、誰かも分からない相手が部屋におり、旧介と香気に会話していることになる。

そうして、恐る恐る声のした方向に振り向けば、そこには少女が立っていた。

薄い橙色をした短い髪に、それより濃い色を持った大きな目。水色をした清楚なワンピースから覗く肌は、透けるように白い。

綺麗な少女だった。

そして、その少女は何故か顔を赤くさせ、唇をだらしなく引き下げていた。

また、吐き出す息も荒く、ハアハアという呼吸の音がはっきりと聞こえる。

言葉は悪いが、変態にしか見えなかった。

（誰だよ。……何でハアハアいつてんだよ、何を盛り上がってんだよ……）

突然の侵入者に旧介は言葉が出なかった。というより、この状況で愕然としない人間がいるだろうか。いや、いるわけがない。

何も言えず、ましてや、動くことなど余計にできないまま、旧介は少女を呆然と見つめていた。

そして、その視線に、少女は赤い顔をまた赤くさせる。

(え、なに、こいつ)

はたから見てみると、申し訳ないが気持ち悪い。

もとより表情豊かというわけではない旧介は、その感情が表に出なかったことに小さく安堵した。

しかし、このままでは埒が明かない。旧介は舌を纏れさせながらも、何とか声を吐き出した。

「……お前、なに？ 何で僕の部屋にいるんだ？ というか、銀貨の話はどうして知ってる？」

「ま、待つてください！ 順番に説明します、しますから……あの「なんだよ」

旧介の質問責めに、少女は慌ただしい声を上げた。白く細い指先はカタカタと小さく震えている。また、大きな目は今にも涙が出そうなほど、揺れていた。

その姿は小動物によく似ている。まるで自分が虐めているような錯覚に囚われ、旧介は黙り込んだ。

少女は困惑しているようで、目をあちらこちらに忙しく動かしている。握り込んだ手を一段と強く握り、少女は目を閉じた。

「落ち着け、落ち着け、大丈夫だから」そうやって自分自身に言い聞かせるように言葉を繰り返し、少女はとうとう目を開けた。

先程とは打って変わり、落ち着き払った眼差しは、どこまでも真つ直ぐに旧介だけを見ている。

少女は大きく息を吸い込み、そして、言葉を吐き出した。

「私、あなたのストーカーです。大好きです。付き合ってください！」

それまでの雰囲気、ガラガラと音をたてて崩壊していくのを感じながら、旧介は渴いた笑い声を上げた。それしかできなかった。

予想外にも程があるだろう。こちらを幸せそうに見つめる少女に、旧介は笑いかけた。

「黙れ変態」

少女はそれでも微笑んだままであった。

狐さんの気まぐれ

香宮司 旧介（カウジ）の見た目は平々凡々なものだった。

枯れ草のような、痛んだ薄い金色の長髪を乱雑にゴムで括り、上下ジャージという、どこからどう見てもだらしない姿。

牛乳は嫌いだが、身長は高い。

顔は吊り目と、赤い目が時折相手に悪印象を与える。しかし、好印象を与えたことはない。

つまり、普通の、平均より身長が高く、少しばかり目つきの悪い青年なのだ。

そんな代わり映えのしない男のストーカーをしている少女は、旧介にとって全く理解不能な存在であった。

そんなストーカー少女は、のほほんと旧介がどうかっこいいのかを、一人で語っている。目を逸らしたくなる光景だった。

しかし、このままでは状況は進展しない。
とりあえず、旧介は少女とできる限りの距離を取ることから始めた。

さすがにストーカーと並んで和気藹々と話せるほど、お気楽な性格はしていない。

部屋の隅に移動した旧介を見ても、少女に気を害した様子はなかった。

「結果的に、お前、何なの？」

「え！ あ……でも、その前にあの」

「何？」

嫌な予感がした。

少女はちらちらと旧介を見ては、目を下ろし、見ては、顔を手で覆い、不審な動作を繰り返す。

何かの儀式かと、馬鹿馬鹿しいことを考えながら、旧介はそれを見ていた。

「こ、告白の返事は……」

「却下」

あまりにも早い反応だと、返事を返した旧介自身が驚いた。

「で、ですよねえ！」

えへ、えへへ、と落胆した様子の少女は、少しばかり気の毒ではあった。

「まあ、それより、お前は何なんだ？ 名前は？ まじでストーリーカ
ーやってんの？」

旧介の質問に、少女は眉を垂れ下げたまま、それでも、丁寧に答えていった。

少女の返事を要約すると、以下のようになる。

・少女の名前は『メイル・エナフィノーラ』という。

・旧介に惚れているらしい。

・旧介が好きで仕方ないらしい。

・旧介のためなら何でもできるらしい。

・好きだ惚れたただのが含まれた内容は無視することに決める。

・旧介のストーリーカーを始めたのは一年前から。（本当は12月2

9日11時58分前かららしい。怖い）

・鬼退治のことは、たまたま仕掛けた盗聴器で聞いた。銀貨の話

もそれで聞いた。

「……分かってくれましたか？ やっぱり、いきなり香宮司こうくわじくん
告白するのはやめた方がいいかなって思ったんですけど、あまりに
今日の香宮司こうくわじくんがかつこよくてもう我慢できなくて」

「あー。ちよいストップ」

「あ、はい！ 何ですか？」

ストーカー少女、もとい、メイル・エナフィノーラは長々と頼ん
でもない独白を即座に切り捨て、旧介の言葉を待った。

もしもメイルに尻尾でも生えていれば、それははち切れんばかり
に振られていたのだろう。

旧介はメイルから聞き出したことを纏めたメモを見ながら、鬱々
とした心持ちで尋ねる。

「お前、盗聴器仕掛けてたのか……？」

問題はやはりこれだろう。

そんなに易々と流せる話ではない。というよりこれは確実に犯罪
だろう。

ストーカーはストーカーでも、末期的なものなのやもしれない。
最悪だ。

そんな旧介の内心など何も知らず、メイルは晴れ晴れとした笑み
を作り上げ、憎たらしくなるまでに綺麗な声で答えた。

「はい！ 盗聴器だけじゃなくて、一応、盗撮もしてました。でも
ああいう機械って難しいですよ……。雑音入っちゃうし。“鬼入
り”のやつは高くて買えないし、大好きな香宮司こうくわじくんのためになら
お金なんてどうてことないって思ったんですけど、やっぱり高い力

メラは買えなくて……」

「お前に金が無くてとても幸せだよ」

“鬼入り”とは、既製品（例えば、電化製品や自動車など）と、鬼の力を掛け合わせて造られたものを指す。

鬼入りの製品は、全ての点において既製のそれよりも上位にあるものだ。

簡単にいうなら、寿命も長く、効率的で、非常に便利な製品だろうか。

ただ、高価な品なので、裕福な人間以外はなかなか手が出せない、というのが唯一のマイナス点でもある。

しかし、どうしたものでしょうか。

旧介の人生の中で、ストーカーに合ったなどということは、当然だが無かった。むしろ、ストーカーに合うなんて、それだけで貴重な体験だろう。

頭を抱えなくなった。

室内が冷えた雰囲気陥っていくのにも、メイルは気付かないように、何が楽しいのか旧介を見つめ続けている。

「やっぱり……じゆんぐわい香宮司くんはかっこいいなあ」

不幸にも耳に届いてしまった、うつとりとした声に、旧介はぞわぞわと背中に悪寒が走るのを感じた。

メイルは旧介を知っているのかもしれない。いや、知っているのだろう。

盗聴盗撮、そして、話には出ていないが、尾行だとかそういうこともしていいそうだ。さすがに出したゴミ袋を漁るなんてことは、して欲しくない。聞く勇氣もない。

しかし。しかし、だ。

旧介はメールのことを全く何も知らない。

20分前によくやく存在を知ったばかりだ。しかも、会って直ぐのストーカー宣言。一年間も続けていたというおまけ付きだ。

クーリング・オフ機能は無いのだろうか。

そこまで考えて、旧介はある違和感にたどり着いた。いや、違和感という程でも無いのかもしれない。

「お前さ」

「は、はい！ 何ですか！」

素早い反応に苦笑いがもれる。

外見は可愛らしいのに、中身はどうしてこうも残念なのだろう。神様とやらは、時に酷いことをするものだ。

「何で僕が好きなんだ？ どうしてストーカーなんてしようと思っただ？」

「え、あ、あの……そ、それは……」

違和感はこれだった。

メールに惚れられ、ましてやストーカーに発展させるような、そんな何かを旧介は持っていない。

これ程にメールが旧介を心酔する理由が無いことに、違和感を感じたのだ。

とは言え、もともとメールのことは全く理解できない。なので、その理由を聞いても、納得できるか微妙なところだった。

メールを見る。

またその顔が赤くなる。これ以上赤くなったら、茹蛸になってしまっやもしれない。

まあ、メールの赤面する気持ちが分からないわけではない。

『どうして僕が好きなのか』という問いに答えるためには、告白まがいのことを言わねばならなくなる。いや、“まがい”でもなく、

告白になるだろう。

しかし、出会った瞬間『ストーカー宣言+付き合ってください』と高らかに叫んだので、そういう羞恥はつきりマイルには無いのかとばかり思っていた。

どうやらそれは外れであるらしい。

「あ、あの……それは、こ、香宮司くんが」

「僕が？」

「香宮司くんが……」

「ああ」

沈黙。

しかし、先程までの冷え冷えとした雰囲気とは違う、まだ居心地のよいそれであった。

マイルは耳まで赤くさせている。年下は好みではない旧介も、ふるふる震える小動物のような姿には、少しばかりぐっと来るものがあった。

しかし、それでも、悲しいことにマイルはストーカーだ。

とつとつ覚悟ができたらしく、マイルは唇をゆっくりと開いた。

旧介はその言葉を、ただ待っていた。

「……あの時、香宮司くんが私を」

「大将！ アンタ、本当にいつ仕事行くんですか！ 依頼人が怒ったらお金貰えないじゃないすか！ お金様が！」

今までの空気を全て破壊した、坊主頭の男は即座に、『自分がないでもない状況で部屋に入ってしまった』ことに気付いた。気付いたが、旧介と距離を置いて座る、見たことのない可憐な少女を見て、思考が停止する。黙っていればよかったのだ。黙って、部屋から

何事もなかったように退出すれば、それでよかった。

しかし、男は言わずにいられない。

「可愛い女の子を部屋に連れ込んで、なに自分だけいいことしようとしてんすかああ！ 死ぬほど羨ましい！ ちよつと私にも紹介し、

」

全て言い終える前に、男の顔面に旧介の拳がめり込んだ。

場所は旧介の部屋から、居間に移る。

小さなちゃぶ台を囲むように、大男、ジャージ男、そしてストーカー少女が座っている。

見るからに異様なメンバーであった。

しかし、その雰囲気は非常に明るい。

「そうなんすか、私アてつきり大将が彼女でも作っただとばかり」「か、かか、彼女なんてそそそんないつかなりたいです！」

「その未来は来ねえから安心しろ」

「大将、アンタ辛辣すぎませんか？こんな可愛い子に……」

大男からの非難を軽く無視し、ジャージ男、もとい旧介はメールをちらりと盗み見る。

出さなくてもいい、というか出すな。そう言ったにも関わらず、でへでへと鼻の下を伸ばしながら、大男が入れた茶を、メールは幸福そうに飲んでいた。

大男の名は、「ガリル」という。旧介とは長い付き合いで、この

家では家事全般を担当している。好きなものは金と女。何しろ、ガリル自身が酷い強面なので、近寄って来る女性は少ない。

そんなガリルにとって、外見も文句なしで普通に会話できるメイは、貴重だということもよく分かる。百歩譲って、媚びへつらっているのも許そう。

しかし、天変地異が起ころうが、その少女がストーカーであることに変わりはない。むしろ犯罪者予備軍でもある。

そんな相手と何が嬉しくて茶を飲まねばならないのか。全く面倒臭いことになった。

「お前、メイ尔だっけ」

「は、はい!」

今まで飲んでいた茶を机にたたき付ける勢いで、メイ尔は声を裏返せながら返事をする。

どうやら名前を呼んで貰えたことが嬉しかったらしい。

本当に犬だなと、半ば呆れつつ、旧介はずっと思っていたことを告げる。

「お前、いつ出ていくの」

「は?! 大将、嘘でしょ? こんなに可愛い女の子になんてことを言っつて」

「ハゲは黙つとけ」

ぎゃあぎゃああと抗議の声を上げるガリルを睨みつける。瞬間、ガリルは口を閉じた。

可愛い女の子と旧介を秤にかけた結果、後者に従う方が賢明だと判断したらしい。賢い選択だ。

黙り込んだメイ尔を見る。名前を呼ばれた時の嬉しさはどこに消えたのか、悲しそうに唇を噛んでいた。

しかし、それでも容赦はしない。

始まりからおかしかったのだ。今のメイルは、この家の異端ではない。ここに在るべきではない人間だ。

ただ、一つ心残りがあるとすれば、メイルの言いかけたあの言葉の続きだった。

確かに、メイルは『あの時』と言っていた。過去の話なのだろう。『あの時』がいつを指すか、さすがに正確には分からないが。

これはあくまで旧介の予想だ。答えはメイルしか知らないのだから、その予測の正当性は分からない。

旧介はメイルに会ったことがあるのかも知れない。

メイルはこう言った。「あの時、香宮司くんが私を」ここまでしか聞き取ることではできなかったが、これがどう続くのであれ、会っていないければ何が続いても難しいように思える。

まあ、いくら考えたところで、答えは出ないのだが。

「……そう、ですよね」

その暗い声に、それまでの思考が掻き消される。

メイルの顔は酷い有様だった。あんなにこころごとく変わっていた表情は、どこに行ってしまったのか、笑みを保つのがやっとの濁いたそれ。見ているだけで、気の毒になるほどだった。

それでも、旧介は何も言わなかった。

「出ていきます。ごめんなさい。非常識でしたよね。いきなりだし

……」

「本当に」

同意の声を示した旧介に、責めるようにガリルが視線を送る。

しかし、旧介はそれを気にもせず、ただ真つ直ぐにメイルを見ていた。

顔を青白くさせたメイルは、それでも笑みだけは保っている。痛々しい表情だった。

メイルはゆっくりと立ち上がる。ふらふらと身体が不安定なのは、精神的なショックからだろうか。

ガリルの玄関まで案内するという提案を、柔らかく断る。ストーリーなので、家の間取りは分かっているのだろう。

断られても、しつこく食い下がるガリルと断るメイルの押し問答をぼんやり眺める。

薄い橙色の髪が力無く揺れていた。

それは、あの光景にどこか似ている。

旧介の世界が終わったあの日。彼女の皮を被ったあの化け物も、髪を揺らして笑っていた。

そこで初めて気付かされる。

メイルは彼女に似ていた。むしろ、どうして今まで気付かなかつたのか。髪の色も笑い方も声も全てが全て、あまりにも彼女に似過ぎていたというのに。

記憶を封印していたのかもしれないなど、旧介は自分自身を嘲笑すにはいられなかった。

これは逃避でしかない。

「本当に大丈夫ですから。優しくしてくださって、ありがとうございます
いました。お茶、美味しかったです」

「……そうですか」

ようやくあちらの話し合いは済んだらしく、諦めたガリルと微笑みを絶やさないとメイルがいた。

メイルは一度こちらを見た。怒られた子供のような目をしている。

小さくお辞儀をしてから、口だけが「ありがとうございます」と動く。

「おい」

旧介の声に、メイルは肩を大きく跳ねさせた。また何か言われるのかもしれないと、少し怯えの混じった大きな目が、それでも嬉しそうにこちらを見る。

「お前……いや、メイル。このあと、暇なのか？」

「……え？」

「暇なのか、暇じゃねえのか、どっちだ」

メイルもガリルも、同じ顔をしていた。驚愕だ。

先程まではあれだけ出ていけ出ていけと口うるさく言っていた旧介が、突然こんなことを聞いたのだ。驚くのが普通だろう。

呆然としたままメイルは、旧介が言った言葉を、聞き直すように繰り返した。

そして、笑う。満面の笑みだった。

「ひ、暇です！ 暇すぎて本当にいろいろとあの大変なくらい暇で

……」

「今からさ、鬼さんぶつ殺しに行くんだよな。一人もなんかあれだし、来るか？」

「いいいい行きます！」

旧介はメイルに笑いかけた。

「じゃあ用意してこい。あとで家の前で集合な」

「はひ！」

思いつきり舌を噛んだらしく、手で口を抑えながらも、メイルは

すごい速さで走り去った。

今から家に帰って用意を整えるのだろう。

ああ。それにしても似ているようで、似ていない。似ていないよ
うで、似ている。

メールには酷なことをしているのだろう。

それでも、旧介の気まぐれな選択は変わらなかった。

狐さんと狸さんの約束

広がる青空の真下に、灰色のトンネルがある。

一見、鉄で造られたように見えるそれは、鉄であって鉄でない物から出来ていた。

鬼入りの鉄。それと特殊な人工知能を持つ機械。これらは、科学与鬼の融合により新しく造られ、時代を一気に発展させた新しい科学だ。

そしてこのトンネルはそれをふんだんに使った、最新型のワープゾーンであった。

とはいえ、歩行型と呼ばれるこの機種は、移動する人間も共に動かねば作動しない。短時間で目当ての地に行くことは可能だが、ハイテクな機械というより、ただ単に少し長いトンネルを歩いているようにしか思えないのが、少しばかり間抜けな点である。

トンネルの中は、一言で言うなら白い。とにかく白い。

清潔感を出すために白い壁にしたらしいが、逆にどこまで言っても白ばかりが目に入る光景は不気味にさえ思われる。

そんな白の中を、旧介とメイルは歩いていた。

二人の手にはぺらぺらとした薄い紙が握られている。青い背景に、赤い文字という目に悪い色彩が並べられたそれは、このワープゾーンのチケットだった。

「便利になりましたよね。ワープゾーン一回につき銅貨5枚だなんて」

「いつそ便利にするくらいなら、歩かなくてもいいヤツ作ればよかつたのにな」

「え？でも香宮司かみやうじくんは歩くの好きですよね？」

黄色いシヨルダーバッグを肩からぶら下げながら、メイルは質問ではなく確認のための言葉を吐き出した。

メイルはストーカーだ。一年という保証付きの、裁判なら有罪になってもおかしくない程に酷いストーカーだ。

もしかすると、旧介よりも旧介を知り尽くしているかもしれない。だからこそその確認。なぜなら、彼女は『旧介は歩くのが好き』という事実を知っているからだ。

「……………何でそう思うんだ」

「香宮司かみやうじくん、いつつも朝6時に軽いウォーキングをしてるじゃないですか。だから歩くの好きなんだあって」

たしかに、旧介は毎朝6時に軽いウォーキングをしている。朝だと頭が上手く働かないことに加え、もとより歩くことが好きだからだ。

初対面の相手が自分のことを何でも知っている、というのはやはり気持ちが良いくない。

「お前さ」

「はい！」

「そうやって普通にストーカー知識を話すな。引くから」

「え……………あ、ご、ごめんなさい！　そうですね。普通は引きますよね」

「分かったならいいけどさ」

ひたすら続く白を眺めながら、旧介はできるだけ低い声にならないよう注意していた。

メイルは本当に表情豊かな少女だ。直ぐに落ち込んでは、瞬く間もなく笑っている。

特に旧介からの言葉には敏感で、何気ない一言に涙目にまでなってしまうのだからいただけくない。

(振り回されてるなア)

身長差がなかなかあるため、旧介はメールを見下ろすことになる。ふわふわと羽の様に揺れる髪の毛が視界にちらちらと映り込んで消えるのを繰り返す。

「……にしても」

「どうしたんですか?」

「よく付いて来ようと思ったよな、お前。いや、誘ったのは僕だけ」

仮にも、鬼退治だ。話しか聞いていないので、鬼がどれだけ強いのかも分からない。

はつきり言っ、とても危険な仕事なのだ。

それに、特技がストーカーの少女をホイホイ連れて来てしまったよかったのだろうか。旧介は早くも後悔していた。

家から出る際、ガリルに何度も言われた言葉を思い出す。

ガリルは鬼退治にメールを連れていくことに反対していた。

当然の反応だろう。

死ぬ可能性さえあるそれに、ストーカーである反面、可愛い少女のメールをお供にするのは決して良い判断ではない。

それでも何故か、旧介はメールを連れて行こうと思ったのだ。気まぐれにしては、頑固な気まぐれであるが。

「まあ、鬼退治にまで連れていくななんて馬鹿なことしねえけどさア。どっかの宿借りて、そこで待っててくれりゃあ良いんだけど。それ

でもやっぱり危険なのは危険だろうし。悪いときには、死ぬかもしれないねえのに」

「……付いて行きますよ？」

「は？」

迷いのない、冷静な声が鼓膜を揺らす。

唐突にメイルが旧介の横から正面に動いた。呆然と動き回る小さな少女を見つめていれば、メイルは橙色の目を旧介に向ける。どこまでも深く、引き込まれそうな橙色だった。

「私は香宮司かみやうじくんから離れません。鬼を退治する時も付いて行きま
す。私が足手まといだと思ったら捨ててください。私を盾に使えそ
うなら、利用してください」

「死にたいのか？」

「ち、違いますよお！ でも香宮司かみやうじくんの邪魔になるのは嫌だし……。それに香宮司かみやうじくんを利用して貰えるなら嬉しいです。その結果たとえ死ぬことがあっても、私は笑えます」

メイルの頭はおかしいのだと、旧介はそう思った。

薄々気付いてはいたが、メイルの価値観と旧介のそれはあまりに
違いすぎる。

メイルが旧介を好きだとして、死ぬものだろうか？そんなに簡
単に、微笑みを携えたまま話せるようなものなのか？

普通は違う。違うに決まっている。

メイルは異常だ。

「あ……でも」

「なに？」

「わ、我が儘なお願いなんです」

そう言って、メイルは唇を噛んだ。言っているものか悩んでいるらしい。

旧介は特に急かすことはせず、目の前の少女を見ていた。異端で歪みに歪みきった、頭のおかしいストーリーカー。笑える程に、酷い存在だ。

「駄目ならいいんです、いいんですけど」

「ああ」

恥ずかしげに旧介を上目遣いで見てから、メイルはおそろおそろ口を開いた。

「もしも私が死ぬようなことがあったら、その時は香宮司カミヤウジくんが私を見取ってください」

異常者のその願いを聞いても、旧介は何も言い返せなかった。意味が分からなかった。

いや、意味は分かる。死ぬ時に傍に居てほしいということだろう。ただ、それを言う意味が分からない。

(コイツ連れて来ねえ方がまじでよかったかも)

理解の範囲外にいるメイルは、旧介にとって宇宙人のようなものだった。言葉も思考も種類も全てが違う。だから理解できなくても許される。

しかし、メイルは人間だ。言葉も通じるし、種族だって同じである。

違うのは生き方だけだ。それが決定的に違いすぎる。

(……もういいや)

そして、旧介はメイルを理解することを諦めた。

「分かった分かった死ぬ時は見てやるよ。サービスで頭も撫でてやる」

「うえ?! ほほ、本当ですか! えっええ……」

「キモい。騒ぐな」

「す、すみません」

メイルの口元はだらしなくにやけている。

頭を撫でるといふ、それだけのことでこんなに喜べるのは、純粹にすごいことだろう。

この話をいい加減に切り上げるため、旧介は止めていた足をまた動かし始めた。

向かい側にいるメイルを押しつけ、また長い白を進む。

置いていかれるのを恐れたのか、直ぐにメイルが隣に並んでいた。

「……約束ですよ」

「分かったつて。違う話しろ」

些か乱暴に旧介が要求した話題の変更にも、メイルは文句を言わなかった。

(従順なのか、そうじゃないのかよく分かんない奴だな)

「じゃあ、ううん……。あ、そういえば、ニクバツ香宮司くんって、ジョー

カーじゃないですよね?」

「ん? ああ、そうだな」

ジョーカーとは、鬼を退治する人間が持つ政府公認の許可証だ。

時に、その許可証を持つ人間をそのままジョーカーと呼ぶこともある。

ジョーカーでない人間が、鬼を退治することは犯罪だ。

「……え、だ、大丈夫なんですか？ 鬼退治に行くんですね？」

「大丈夫、依頼人もその点については了承してる」

「そういうことじゃなくて、……犯罪ですよ？」

「ストーカーが何を言ってるんだ？」

その日旧介が発した声の中で、一番、冷めた低い音だった。

さすがのメイルも、小さな肩を揺らして怯えた表情をしている。

旧介は普通の青年である。

ただ人より高い身長と、鋭い赤目のせいで、威圧感は有り余る程にあった。

「え……でも、じゃあ」

メイルの声は震えている。さすがに言い過ぎたかもしれない。

メイルがストーカーなのは何よりの事実ではあるが。

気まずい空気に、旧介は枯れ草色をした長い髪を、落ち着きなく弄りだした。

それは、困ったときや考え事をするときの旧介の癖である。

(面倒臭え、びびるなよ。本当のことだろ)

トンネルの出口が見えはじめた。やけに長い時間だったように思えるが、実際は10分も経っていない。

本来、依頼人のいる場所に行くためには三日かかる。それを10分歩くだけで行き着くことができるのだから、ワープゾーンもなかなかに侮れない。

しかし、今の旧介にそんな些細なことはどうでもいい。

トンネルを抜けた後も、こんなに気まずい雰囲気なのだろうか。それはあまりに苦痛だ。

隣の橙色をした頭を盗み見る。

だが、旧介とほぼ同時に、メールも顔を上げていた。合わさる視線。

「……おい、いつまでも」

「じゃあ私たちお揃いですね！」

うじうじするなよ。旧介なりの気遣いの言葉は、甲高い少女の声に見事に掻き消された。

「は？」

「だって、ストーカーの私と、ジョーカーじゃないけど仕事を受けてる香宮司（かみやうじ）くん。どっちも犯罪者ですよ。あ、まだ予備軍になるのかな」

「は？」

トンネルの出口にたどり着く。ようやく目的地に着いた喜びを噛み締める前に、旧介は硬直していた。

「わ、私たち、運命の赤い糸で繋がってるのかも……」

えへへと特有の笑い声を上げたメールを見ながら、旧介は思い知っていた。

理解できるとかできないとか、そういう問題ではないと。

思わず、目の前の少女に「お前宇宙人だろ？」と聞いてしまいそうになるのを、旧介は必死で堪えていた。

狐さんからの命令とお話

「い、依頼主さんはやけに辺鄙なところに住んでるんですね？」

「そうでもねえと思うけどな。僕の家周りだってこんなもんだろ」

「こんなに酷くは無いですよ……」

旧介とメイルは森の中に居た。

トンネルから出た後、目的地の途中にある小さな町で宿を借り、そこに邪魔になりそうな荷物を全て置いてきた。

なので、今の旧介もメイルもとても身軽な状態にある。

目的地までの地図を片手に持ちながら、旧介は歩きにくい木々の中を、楽々と通り抜けた。

時刻は昼。昼食は宿で取ってきたために、空腹感を感じない。

「あとどれくらいで着く予定なのか、教えてくれませんか？」

朝やトンネルの中で聞いたものより、幾分かトーンの落ちた声に、旧介は後ろを振り返る。

髪の毛に葉っぱや蜘蛛の巣を絡め、激しい運動のせいか息を荒げ、それでも懸命に歩き続けるメイルがそこに居た。

旧介にしてみれば、どうということはない道であっても、女性であるメイルにこの場所はなかなか過酷なようである。

（それでも、頑張ってる方ではあるんだけどなア……）

ストーカーだったからか、それとも基より体力はあったのか、こちらの女性よりは体力もあるし、運動神経も申し分ない。それに加え、メイルの凄い所は弱音を吐かないことだろう。

かれこれ、道とも呼べない森の中を2時間は歩いている。正確な時間は計っていないので、それ以上ということもあるかもしれない。その間、メイルは一度として弱音を言わなかった。疲れは確実に溜まっているだろうに、旧介に遅れを取ることをさえ無かったのである。

根性があるのか、はたまた我慢強いただけなのか、旧介には判別できない。だが、うだうだと弱音を吐く意気地無しが同伴であった場合を考えれば、メイルの強さはとても幸運なことだろう。

「あと少しで着く。……しんどいなら、一旦休憩するか？」

「いえ、大丈夫です！ これくらい全然へっちゃらです」

「我慢強いのはいいことだけどさ、それで後々ぶっ倒れるようなことがあると困るんだよな」

「大丈夫です！ 心配して、くれてるんですよ？ 幸せです。香こ

宮司うぐつてくんをもっと好きになっちゃいそうです……」

「ああそう」

今度は別の意味で頬を赤らめ、口元をだらしなく下げるメイルに、旧介は分かりやすく眉を歪めた。

心配をしたわけではなく、本当に倒れられると迷惑なのでそう言ったのだが、これだけの軽口で返せるなら大丈夫なのだろう。

旧介は、止めていた足を再び動かし始めた。

何故、依頼人の家がこれ程に到達しにくい場所にあるのか。

その答えはとても簡単だ。

鬼に狙われている人間は、総じて“鬼憑き”と呼ばれている。そして、鬼憑きになった人間が何より恐れるべき相手は鬼ではない。

周りの人間たちである。

あまりにも皮肉な話だ。だが、それはある意味当然のことでもあるのだろう。

“鬼憑き”に人を襲う気が無かったとしても、周りの人々はそれをやすやすと信じるだろうか？受け入れるだろうか？

そんなわけがない。

鬼は人を食い殺す化け物だ。

それに憑かれた人間はもはや人間ではなく、化け物同然だと人々はそう考える。仕方がないことだ。なぜなら人々にとって、鬼は恐怖の対象でしかないのだから。

そうした環境で“鬼憑き”は虐げられ、忌避され、迫害を受けることになる。最悪、鬼では無いにも関わらず、『鬼退治』として殺されることもある。

だから、鬼憑き達は人から隠れるために森や山に逃げ込む。そうする以外に、自身を守る術が無いからだ。

「あ、香宮司くん。もしかして、あの小屋が目的地ですか？」

「ん？ ああ、あれだな」

今回の依頼人もその例外ではなく、こんな人里離れた森の奥に住んでいるのだろう。

メールの指差した方向を見れば、薄汚れた小屋がぽつんと寂しげに建っている。地面は湿り気を帯び、蔓延る木々のせいで太陽の光は注がれない、暗い場所であった。

小屋との距離を狭めながら、旧介は隣に並んだメールを見ることもなく、口を開いた。

「お前さ、分かっているとは思っただけど」

「何ですか？」

「僕と依頼人が話してる時に、変な口出しは絶対にするな。黙って後ろで見ておけ。ただ、もしも気になることがあれば、それは僕と二人だけになってから言え。いいな？」

「はい！頑張つて黙りますね」

黙ることに、頑張るも頑張らないも無いだろう。思わずそう突っ込んでしまいそうになるのを、旧介は何とか堪えた。

なぜなら、黙れだの何だのという明らかに酷い命令を言われたにも関わらず、メールがやけにそれに意気込んでいるからだ。

「必ず任務を遂行させてみせます！ 期待しててくださいね」
「……ああ、期待しとく」

旧介は、棒読みでそう答えた。そう言う他に何ができたのだろう。黙るなんてやろうと思えば、子供にもできることだ。

それをどうしてこうも重大任務を背負った期待の星みたいな顔をするのか。

とはいえ、命令に従わないよりは確実にいい反応だということも事実ではある。

（扱い方がよく分からねえな、コイツ……。ストーカーをうまく扱う10の方法とかいうマニュアルあったらいいんだけど）

メールの明るい雰囲気にも呑まれ、馬鹿馬鹿しいことを真剣に考えながら、旧介はゆっくりと足を止めた。

目前に立ちはだかるは件の小屋くだんである。

遠くから見ている気がなかったが、壁は腐りかけの木できており、穴や傷などがそこかしこにあった。腐りかけの木はともかく、穴や傷は見えている限り人為的なものである。

やはり、迫害されているのだろう。

依頼人も、好んでこんな場所に住んでいるわけではあるまい。もともと住んでいた場所は、旧介とメールが宿を借りた町辺りやもしれない。あれ以外、ここらに町は無いらだ。

旧介はメイルを一瞥してから、ぼろぼろになった扉を叩いた。それだけの振動で悲鳴を上げて軋むのだから、もうこの小屋はそう永くないのだろう。

「……はい？」

「初めまして。今回、“鬼退治”を依頼して頂いた者です」

扉から、警戒心を丸出しにしながら出て来たのは背の高い女性であつた。

すらりとした長い手足と、艶のある真っ直ぐな長い茶髪。鋭い目の下には、ありありと隈が存在を主張している。服もみすばらしいものであり、彼女が苦しい生活をしていることは一目で分かつた。

鬼退治。

その言葉を聞いた瞬間に、女の表情が一変する。それは、地獄でようやく救いの光を見た人間のそれに似ていた。

がしりと、唐突に、女は旧介の肩を掴んだ。爪がジャージを通して皮膚に食い込みそうなほどの力に、旧介の眉間に僅かばかりの皺が寄る。

「お、お、遅いんだよ……！ あ、あたしが、ど、どれだけお前を待ってたか、分かる？ こんな気味悪いところで暮らしてさ、惨めにも程があるだろう！ 早くあの化け物を殺してよっ」

「落ち着いてください。それに、退治するかまだ決まったわけじゃありません」

「……は？」

髪の毛を振り乱して悲痛な叫び声を上げていた女は、旧介の声に動きを止めた。

信じられないというように、限界まで見開かれた目。

旧介は肩を掴む手を、できるだけ優しく払い落とした。

「退治してくれないの……？」

「いや、言い方が悪かった」

弱々しく震える声に、旧介は即座に返事を返した。

「……とりあえず、話の続きは室内でしませんか？こんなところで話すようなものでもないの」

旧介の言葉に、女はゆっくりと頷く。

無言で扉を開けたまま、小屋の中へ進む女の後続く形で、旧介とメールも足を踏み入れた。

室内は予想以上に酷い有様だ。穴の空いた屋根から侵入するよう
に木々が生え、床は歩きたびにぎしりと悲鳴をあげる。

もはや家と呼んでいいかも分からない状態である。

旧介の後ろを付いて歩くメールも、その光景には驚きを隠せなかつたらしく、目を見開きそこらを見回している。口を手で覆っているのは、旧介の命令を忠実にこなしているからだろう。

女は旧介とメールに、椅子に座るように言うてから、自身も向かいに腰を下ろした。

少し時間が経ったことで落ち着きを取り戻したらしく、女は「さつきはごめん」と恥ずかしそうに呟いた。

「あたし、本当に嬉しくつてさ。これでこんなところからおさらばできると思つと、もう、なんか止まらなくなつて」

「慣れてるので大丈夫ですよ」

少ないながらも、旧介は鬼退治を何度かしたことがある。その際、鬼憑きである依頼人たちは全員が冷静さを忘れていた。

彼らにとつて、旧介はようやく現れた救世主であるのだろう。だから必死で助けを求めるのだ。

助かりたい人間が依頼主になるのは、必然のことだろう。

「……そ、それで。鬼を退治しないかもってどうということ？ 金はあるんだよ。約束は破らないさ」

「金銭の問題ではなく、僕の問題です」

「は？」

女が身を乗り出す勢いで、旧介を凝視する。強い視線から逃げることもなく、淡々と旧介は続けた。

「まずもって貴方を狙う鬼を見る必要があります。僕は今まで人を食べる鬼の退治しかしたことはありません。ですが、もし、貴方を狙う鬼が高い知能を持つとされる契約を誘うタイプであるなら、殺されるのは僕になるかもしれない」

「つ、つまり、お前が鬼に敵わないかもってこと？」

「まあ、そうですね。了承して頂いていますが、僕はジョーカーじゃない。ただの人間です。僕が勝てないと判断した場合、鬼退治を引き受けることはできません。意味ないですから」

「……そんな」

絶望に顔を青くさせた女を見ながら、旧介は沈黙していた。言わねばならないことは全て言った。

旧介は馬鹿ではない。勝てないと分かった相手に、わざわざ死ぬと分かりながらも戦いを挑むほど熱い性格もしていない。

だからこそその言葉である。

（まあ、今までの鬼退治は結構楽に倒せたんだけどなあ。全部人喰いのやつで、契約したがるのじゃなかったからだろうけど）

女は顔を俯かせ、身体をがくがくと震わせていた。頼みの綱にもしかすれば見捨てられるかもしれない。考えたくもない可能性に、怯えているのだろう。

旧介は無表情に女が何か言うのを待っていた。

そして。

その女を見る者がもう一人居た。

メイルである。

メイルは口をしつかりと結んだまま、可笑しいものを見るような目で、女を見ていた。

その表情に悪意は無い。ただ純粹にどこまでも不思議で仕方がない。そんな顔である。

旧介は、メイルの僅かな変化に気付くことはなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8951z/>

ジョーカーな狐と狸さん

2012年1月3日02時46分発行